

# 沖縄周辺海域でのソデイカの分布と移動（要旨）

渡辺利明・金城清昭・鹿熊信一郎

沖縄県では、1989年にソデイカの樽流し漁法を改良した旗流し漁法が導入されて以来、ソデイカ漁業は短期間に県内全域に普及した。近年ではソデイカの年間漁獲量が2,000～2,500トンとなり、ソデイカ漁業は重要な沿岸漁業となっている。沖縄周辺海域のソデイカについては、ソデイカ漁業の展開とともに分布水深・深浅移動などに関する知見が得られているが、漁業対象資源を理解する上で重要な分布や移動・回遊については殆どわかっていない。沖縄県水産試験場では、既存漁場より沖合でのソデイカの分布と移動・回遊を明らかにするための試験操業と標識放流を1999年から開始した。ここでは、現在実施中の2002年から始まった第2期調査の途中結果を中心に報告する。

## 試料と方法

2002年12月から2004年4月にかけて沖縄島の南沖海域（北緯20～25度，東経124～134度）において、沖縄県水産試験場調査船図南丸でソデイカ延縄試験操業を実施した。使用した延縄は、幹縄水深が約400mで、600m間隔に浮きを付けた。浮き縄と浮き縄の間には100m間隔に5本の枝縄を取り付けた。各枝縄には1個の水中ライトと2個の擬餌針と錘を付けた。1回の操業では、100本の枝縄を使用した。また、標識放流では、ホールプリント社製ダートタグ（PDBタイプ/全長12cm黄色）とマイクロウェーブ・テレメトリー社製ポップアップタグ（PTT-100 APPUJ）の2種類を使用した。

## 結果と考察

試験操業を実施したほぼ全域でソデイカは漁獲され、沖縄島南沖海域で広範囲にソデイカが分布していた。釣獲率（ソデイカ漁獲数 / 擬餌針数×100）は0～10.9%で、ソデイカ延縄漁船の平均釣獲率10%程度あったのは、全操業海域の6%であった。第1期調査の沖縄島東沖海域（北緯25～27度，東経130～134度）では、釣獲率が1.0～24.3%で、延縄漁船の平均釣獲率以上の海域は54%あったのと比較すると、南沖海域での釣獲率は低かった。したがって、沖縄島南沖海域にはソデイカは広く分布しているものの分布密度は既存漁場や沖縄島東沖海域より低いと考えられる。

試験操業を実施した10～5月の間に漁獲したソデイカは、10月には外套長55～65cmが多かったが、12月になると70cm以上の個体が増加し、3月以降は70cm以上の個体が主体となった。また、この間漁獲した雄イカの殆どが性成熟していたのに対し、雌イカは12月以降に外套長60cm以上で成熟個体が増加し、3～5月には全てが成熟していた。

標識放流では、4例のダートタグ標識イカの再捕と2例のポップアップタグのデータ回収があった。6例中5例で、西方向への移動がみられ、沖縄島南海域でのソデイカの東から西への回遊が示唆された。放流地点と再捕地点の直線距離から推定した標識放流イカの移動速度は0.1～1.1km/hでケンサキイカやスルメイカで報告された移動速度と同程度であった。

平成16年度イカ類資源研究会議

平成16年8月4日～5日